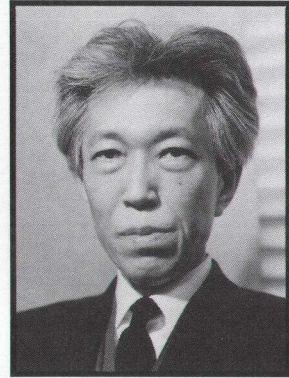


一柳壽一先生を悼む

東北大学名誉教授一柳壽一先生は去る7月14日逝去された。哀惜の念に堪えない。先生は東京のお生まれで、1931年東京帝国大学理学部天文学科を御卒業、ただちに東北帝国大学に赴任され、1973年に停年を迎えられている。1947年、私は当時の物理学科の新入生の通例として先生の一般天文学の講義を受けた。ソフト帽をあみだにかぶり飄然と教室にあらわれた先生のお姿が今も印象に残っている。ここにあるお写真は、ご退職の前年仙台で開かれたシンポジウム「銀河の構造と進化の理論」の集録の巻頭を飾っているものである。

先生は、論文を分類してカードを作ることを習慣としておられた。研究や勉学上の相談に何うと、カード箱から、関連するカードの束を取り出され、そのなかから、読むべき論文を指示され、ご助言下さったものである。1950年のことである。まだ戦後の混乱期で、海外の新しい文献を読むことは困難であった。夏、広島に帰省していた私に、先生から一通の速達がとどいた。原爆障害調査委員会（ABCC）におもむき、公表されたばかりのハイゼンベルクの乱流理論の論文やその他の論文を筆写して送るようにとのお手紙であった。ご指示のあった手続きをすませて、早速、ご用命にお応えしたが、このように、先生は新しい情報に心を配り、新知識の吸収に熱心であられた。この年は、1月に急逝された松隈健彦先生のおあとを受けて、先生が教授になられた年でもあった。秋、仙台で開かれた天文学会の懇親会でのことである。隠し芸のリクエストがホスト役の先生に集中した。先生はすっくとお立ちになり、プーシキンの詩を原語で滔々と暗唱された。かなり長い詩であったと記憶している。因みに、私は座敷の隅の火鉢でお燗番をしていた。お酒は郡部で調達してきた闇酒であった。ご退職を機に、先生は、広瀬川を眼下に望む片平の一角に新築のマンションをお求めにな



り、下宿での「お二階の先生」から、自炊のお暮らしを始められた。書籍と学術雑誌に埋もれたお暮らしで、テレビというようなものは一度も身辺に置かれることがなかった。11年前、教え子や天文学教室で先生にゆかりのあった人達が集り、先生の喜寿のお祝いをした。先生は、最初、このことを固辞しておられた。本来家庭内に留むべき慣習であること、ご自身のことで貴重な時間の浪費と出費をさせるのは不本意であるというのが理由であった。最終的には、しぶしぶ、ご承諾いただけたが、こういうことについて先生は頑固であられた。今年になって、先生の米寿をお祝いしてはという話がちらほらと出ていたようであったが、実現をみることなく、先生はお亡くなりになってしまった。先生に、リアプーノフについてお書きになった伝記風の小文があり、その末尾に「丁度樹木が春夏を経て秋になって、その成熟した果実をぼたりぼたりと落として行くのと同じような彼の生涯を僕は悲劇的だとは思わない」とお書きになっている。41年前にお書きになったこの短い文章に、なぜか、先生のご生涯が悉く凝縮されているような気がしてならない。心からご冥福をお祈り申し上げます。

須田和男（元東北大学天文学教室）